

中高6年間における「心の成長過程」の分析

筑波大学附属駒場中高等学校 生徒部

岡崎 勝博・加藤 裕司・八宮 孝夫
寺田 恵一・根本 節子・小澤富士男
更科 元子

中高6年間における「心の成長過程」の分析

筑波大学附属駒場中高等学校 生徒部

岡崎 勝博・加藤 裕司・八宮 孝夫
寺田 恵一・根本 節子・小澤富士男
更科 元子

1. はじめに

「生徒や親の質が年々変わってきている」という指摘は、近年、毎年のごとく教員から聞かれる言葉である。生徒の何が変質し、どこに原因があるのかということについては様々な分野からメスが入れられ、「今日の子ども像」を把握しようとして多数の研究がなされている。

本校においても、1999年より2年間にわたり「個々の生徒に即した生徒指導の可能性について－多様化・個性化の進行の中で生徒指導を考える－」というテーマで研究がなされてきた。その中で、本校生徒の質も家庭・家族の孤立化と、快・不快を行動選択の軸にする消費社会文化に影響され、自己本位な生徒の出現（量的な拡大）と、それと対立する学校価値文化の諸機能（授業、学校行事、クラブ活動など）が、従来と同様の効果的な機能を果たしていないのではないのかという指摘がなされている。

この複雑化する社会、価値の多様化する社会と学校そのものの存在価値が問われている中では、この学校価値文化の是非自体を論議する必要もあるが、少なくとも本校の学校価値文化の中で育ち、りっぱな「一人前」として人格を形成していく生徒が多数確認されるうちは、その機能の効率化を考えていくことが必要である。

本研究では、本校の学校教育機能が生徒の心の成長にどのように影響を及ぼしているのかについて明らかにすることを目的とした。公立学校と比較すると、かなり特殊な質の生徒集団が、中高6年間の中でどのように「心の成長」をたどるのか、その成長過程とその過程に影響を及ぼした契機について調査し、今後の本校の教育機能を再検討する上での資料を得ることがねらいである。

2. 調査目的

- 1) 中・高校生期の「心の成長」の足跡を調べる。
- 2) 「心の成長」に影響を及ぼした事項（友人関係、クラブ活動、学校行事など）を調べる。
- 3) 連絡進学者（以下、内部生）と高校入学者（以下、外部生）の成長の違いについて検討する。
- 4) 外部生が持つ本校生徒及び本校の教育に対する違和感と同化過程について調べる。

3. 調査方法

「6年間の心の成長」（仮説として作成したもの、図1）を授業において解説し、「自分なりの心の成長の足跡」及び「成長に影響を及ぼした事項」を記入させた（図2）。また、外部生に対しては「本校に対する違和感及び同化したならばその過程について」記述させた。

4. 調査対象

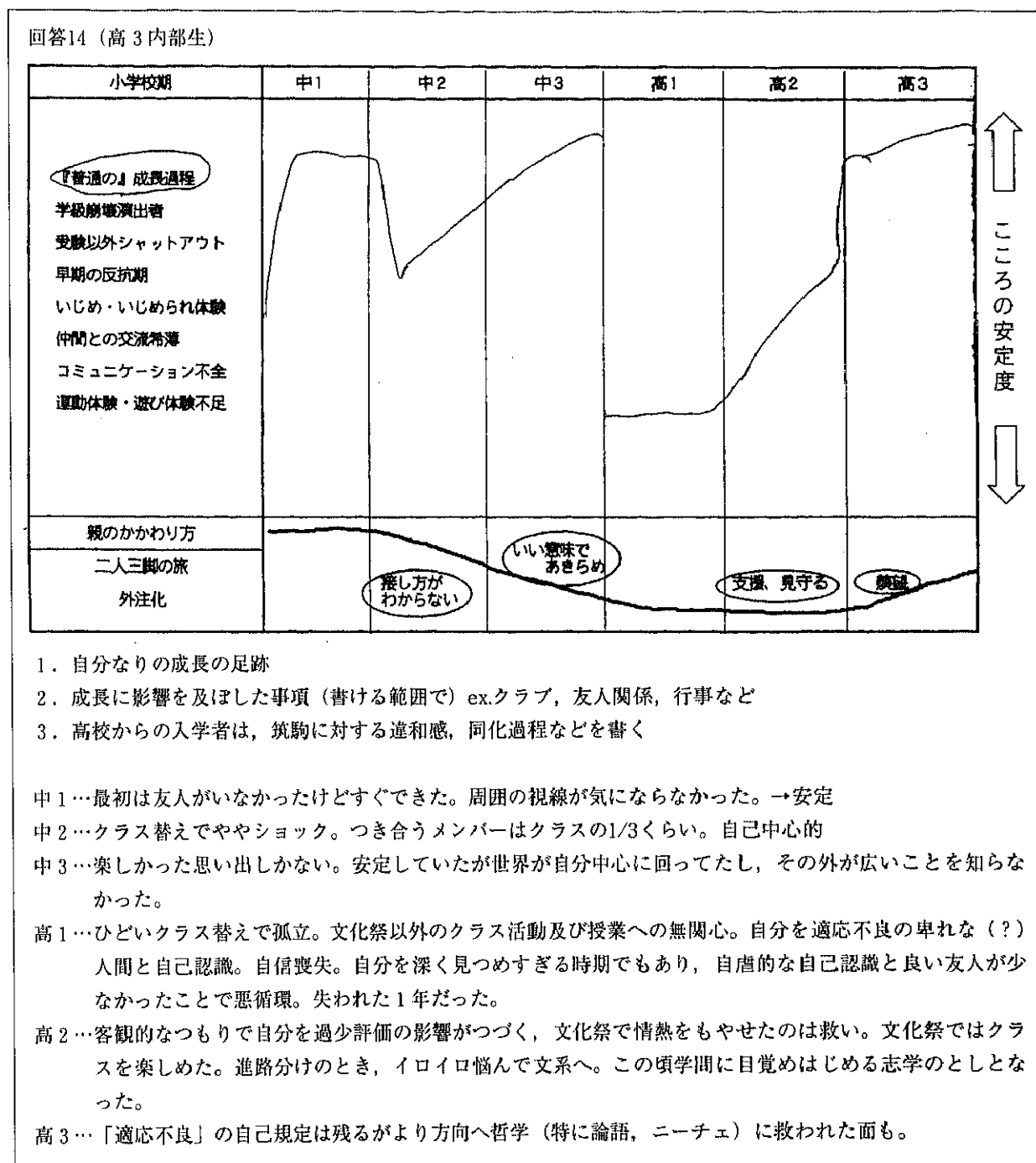
調査対象は、高校1年生164名、高校2年生164名、高校3年生160名。なお、高校1年生には、中学校時代の変遷と外部生の本校に対する違和感が明らかになることを特に期待した。高校2年生では、外部生がどのような契機で同化していくのかが明らかになることを期待した。高校3年生では、6年ないし3年の変遷と高校2年生からの変化が明らかになることを期待した。

5. 結果及び考察（中間報告）

（1）本校生徒の中学校期の「混乱期」「不安定期」「中だるみ」の存在について

内部生の特徴は、中学2年から3年生にかけて、明確な「混乱期」を示すことである。外部生では、「混乱期」を記録する者もいるが、その数は圧倒

図2 6年間の心の成長の一例



的に少ない。

この「混乱期」を起こす契機は様々考えられるが, 底に横たわっている問題は, 多くの生徒にとって共通性のある問題が存在していると考えられる。多くの生徒が挙げる理由は大きく2つ存在し, 一つは「自分に対する自信喪失」であり, もう一つは「自己中心的な生徒への対応」である。

「自分に対する自信喪失」では, 小学校時代に

は勉強や他の面でも優位に立てていたことが, この学校では簡単には優位に立てないことを自覚することにより発生する。この自信喪失が「混乱期」の原因とする者は, どちらかというとも中学1年から中学2年にかけて「混乱期」を迎えると記述している。

「自己中心的な生徒への対応」では, 自己中心的な言動や行動をする生徒たちへの対応に苦慮し

たり、不信感をもったりするところから現れている。この自己中心性と反抗期が重なっている場合があり、そのような場合には本人の混乱もさることながら、周りの生徒に与える影響も多大なものがあり、かなり過ごしにくい環境を作ることになる。

また、自信喪失による「混乱期」の時期と比較すると、この原因による「混乱期」の出現は、中学2年～3年にかけて見られる生徒が多い。

外部生で「混乱期」を指摘するものは少ない。その理由としては、小学校から同じ仲間が中学校に進学してくることや公立中学では成績面や精神面で優位に立てることを挙げる生徒もいる。

(2) 模索期への契機

心の成長過程は、「自分くづし」という「混乱期」から、模索期に至る。それがどのような契機によりもたらされるのかをみた。もちろん、混乱期や模索期は、明確に区別されるものではないが、本人が何によって自己形成に向かったのかを記述内容から拾い上げた。

多くの生徒は、クラブ活動や学校行事を挙げている。クラブ活動では、上級生との繋がりのなかで視野を広げたり、支援されたり、目標を作ったりしながら、自分を見つめ直したり、積極的に自己形成に向かおうという意欲を持ったとする記述が見られる。

(3) 外部生徒の本校への違和感

違和感には、肯定的に捉えられている事項と否定的に捉えられている事項がある。

〈肯定的な意見〉

「学力面で優秀」

「誰もがリーダーシップがとれる」

「画一的でない」

「行事への意欲」

「HRでの一体感」

「生徒が均質でやりやすい」

〈否定的な意見〉

「価値観が固まり、柔軟性がない」

「自己主張が強い」*この意見も多数

「人の話を聞かない、他人を馬鹿にすることがある」

「ルーズ」*この意見は多数

その他の高校1年生の外部生の意見

「・・・中学生はほとんどの奴がガキだ。そんなガキどもをこの学校のように開放的にしてしまえば他からしばられるということを知らずに成長して、後でつらくなると思う」

「女がいないのでカッコつける必要などなく、異常な自由さが後押しして、いわばアットホームな世界になっている。内部生はその世界に閉じこもっていて、外の世界を知らないようだ」

(4) 同化過程

外部生の同化過程は、それぞれの学年のカラーや個人の特性に大きく左右されている。どの学年も学校行事やクラブ活動を通じて同化しているようである。学校行事が外部生の同化過程に果たす役割について以下のような記述がある。

高校2年の「中夜祭を一生懸命やることにより『筑駒生』になった」

また、時期に関してもまちまちであるが、早い場合は高校1年の2学期ごろより、多くは1、2年生でとりあえずの居場所ができ、3年の文化祭に向けてさらに交流の輪が広がり「筑駒生」としてのアイデンティティを形成していくのではないかと予想される。

(5) 二つの発達課題

調査を通して、本校生徒が直面したり、通過する発達課題が二つ存在するのではないかと考えられる。一つは、中学生の「自分くづしと自分づくりの過程」であり、もう一つは高校2年の頃からの「自己拡大」とでもいうような課題である。

この「自己拡大」では、学問による拡大や友人関係の拡大、学校外の人間との交流などが契機となっている。この概念＝高校生にとっての発達課題は、余り論じられてこなかった概念である。いずれにしても、中学生期にある程度できた自己を再構築するという過程が高校1年の後半から2年にかけて存在するのではないかと予想される。ただ、この変化は中学生期の変化ほどはドラスティックには現れないようである。